

このお話は章と章の間にあるお話であり、前作と地続きになっています。そのため前作のあらすじを載せておきます。副読本程度にお考え下さい。

あらすじ

この世界では人類以外にも吸血鬼や人狼、サキュバスなどが共に暮らしています。

主人公ケ빈は、吸血鬼のヴァニタスの館に居候しています。そこにサキュバスのノーラが訪れます。ノーラはヴァニタスと親しく、ヴァニタスのある仕事の顧客でもあります。二人が話し込んでいるところにケ빈が訪れ、お話は始まります。

女性に慣れていないことを見抜かれてしまったケ빈は、ノーラに弄ばれてしまいます。ヴァニタスの一声でノーラは離れましたが、ケ빈はノーラに対して苦手意識が芽生えてしまいました。

地下室の貯蔵庫へ向かう三人。しかし地下室でノーラとケ빈はひと悶着起こしてしまいます。そしてノーラがケ빈の親の事で地雷を踏んでしまい、ケ빈は地下室から出て行ってしまう。

自室にこもっていたケ빈の元に二人は訪れます。謝った二人を部屋へ招き入れ、三人で並んで座りケ빈の両親の写真を見るようになります。

そしてケ빈の希望で甘めのミルクティーを暖炉のある部屋でみんなで飲みます。

帰り際、ノーラがケ빈の頬にキスをして自家用車に乗って去っていきました。今回はその後のお話になります。

ケビン・アストンはソファに座り込みぐったりしていた。

「大丈夫かい」

ヴァニタスが新しく紅茶をいれながら聞いてくる。

「疲れた」

言葉少なな返答にふふ、とヴァニタスは笑みをこぼす。

微笑みながらケビンに紅茶の入ったティーカップを渡す。今度はストレートで砂糖なし。茶葉はヴァニタスオリジナルブレンドだった。

「ありがと……。いい香りだな」

一口飲んだケビンが呟く。

「……ご両親の話はすまなかったね」

謝るヴァニタスに対し、ケビンは視線をカップ落とし小さな声をこぼす。

「いいんだ」

「あの子は悪い子ではないんだが、言動や態度がね」

「食われるかと思ったよ」

「ははは、それは傑作だ」

笑い事じゃねえよ、とケビンはヴァニタスの肩を小突く。いつもの調子に戻ってきたようだった。

「何であんな奴と知り合いに？どこで出会ったんだ？」

ケビンの問いに、ヴァニタスは事もなげに答えた。

「ちよつと遠い親戚の子なんだ」

「親戚い？サキュバスと吸血鬼が？」

ケビンはかなり驚いた様子で、ティーカップを落としそうになった。

「僕の出自がそこそ複雑でね」

そう言いながらヴァニタスは優雅にお茶を飲み、自分の出自について話し始めた。

最初に覚えているのは、両親の後ろから見た真っ黒で背の高い大爺様の姿だった。ギロリと、睨むような視線に両親の陰に隠れたと言う。トランシルバニアの

端にある大爺様の住む城は荒涼とした丘の上にそびえ立ち、その威厳と今にして思えばある種の寂しさが伺える場所だった。

『大爺様に挨拶して』

母が優しく背中を押す。母と父の顔を交互に見るが、父はその精悍な顔でこちらを見ようとせず、口を真一文字に結び目を合わせてくれない。母は微笑んでいるがどこか張り付けたような表情だった。

母も父も混血児だった。母はサキュバスと吸血鬼、父は人狼と吸血鬼。その頃の吸血鬼の世界ではまだ混血への当たりが強かった。軽蔑され排斥される、そんな二人が出会い、共に暮らし自分が生まれたのは必然だったのかもしれない。

「だから寒さや日光に強いのか」

ケビンの言葉にヴァニタスは静かにうなづく。

「母様も父様も、命がけで故郷を出るつもりでいたんだ。そのためには幼い僕は足手まといったんだらうね。だから大爺様の元に預けられたんだ」

ヴァニタスの視線が、ずつと遠くの記憶を紡ぐようにティーカップに注がれる。

「僕は捨てられたんだ」

ケビンは何も言えずにその様子を見ているしかなかった。

「大爺様はご長命な方で一族の中でも発言力があつたんだらうね、混血児に理解がある人だった。本人も大昔にエルフと結ばれたことがあつたと言う噂さえあつた方だったからね」

深淵のように真っ黒で、何を考えているかわからない瞳を思い出す。

『よ……よろしくお願いします』

幼い自分が一步踏み出し大爺様にお辞儀をする。顔を上げたとき、頭を撫でられた。節くれ立った大きい手だった。

その後、両親は無事に故郷を脱出できたらしく、両親と再会することはなかった。だがたまに絵ハガキが届いて幼心に嬉しかった。

成人するまで大爺様の元で過ごし、マナーや魔法の基礎など一人で生きていく術を学んだ。厳しい面もあったが、いつか両親と再会するためにと嚙り付いて学んだ。

今はもう両親の生死もわからなくなっているのに。ヴァニタスにとって古びた

絵ハガキの束が唯一の両親との繋がりだった。ただ本名で送られていたのでその絵ハガキたちは鍵付きの引き出しの奥底で眠っている。本名を知られるのはたとえ半分の血であろうとも吸血鬼として隷属させられる可能性をはらむ危険なものだからだ。

ヴァニタスは冷めた紅茶の残りをあおり、ティーカップをテーブルに置いた。「ノーラは母方のいところになるのかな、僕がこの屋敷に移り住んでからツテを辿って訪ねてきたんだ。地下貯蔵庫のお客様一号になってくれたよ」

ケ빈はティーカップを両手で持ちながら、テーブルを挟んだ向こうに居るヴァニタスを不思議な気分で眺めていた。はるか遠くに居るように感じていた。

「あんたも苦労してきたんだな……」

その呟きに対し、微笑みながらヴァニタスが答える。

「君もね」

その言葉にケ빈は何も言えなくなり、静かに紅茶の残りを飲み干すしかなかった。

二人が紅茶を飲み終わると、ヴァニタスは茶器を片付けにキッチンへ向かった。ケ빈は暖炉へ足を温めるように伸ばしながら深く深くソファに沈んでいた。

ヴァニタスの半生と自分の半生をダブらせて考えてしまい、頭の中で整理が追いつかなかった。悶々としてしていると洗い物を終えたヴァニタスが手袋をはめおしながら戻ってきた。

「なあ、ヴァニタス。なんで今更俺に地下を見せてくれたんだ？俺に見せたって価値も解らないのに」

ケ빈のその問いに、整った顎髭をさすりながらヴァニタスが言う。

「いい機会だと思ってね。別に隠してはいなかったけど、まあ隠し事無しってことで。友人だしね、教えておきたいと思ったんだ」

友人ね、と満更でもなさそうなケ빈の様子を見て、ヴァニタスは何かを思いついた様だった。

「ああそうだ、ケ빈に紹介しようか、これまでの友人たち」

困惑したケ빈を尻目に、こつちだよと声を掛けながらヴァニタスは扉を開け目的の場所へ行こうとしていった。置いてかれまいとケ빈もソファから立ち上

がりヴァニタスを追いかけた。

ヴァニタスの私室に近い廊下にそれらはあった。老若男女の肖像画や写真が額に収められている。また、献花のようにユリの花が花瓶に飾られていた。

その一番奥、私室に一番近い壁に掛けられた肖像画の前にヴァニタスは立っていた。

目の前にある肖像画には、金髪に緑の瞳でこちらを見ながら微笑んでいる少年が描かれていた。

「最初で最後の眷属にしたのがこの子なんだ。想い人がいるのに流行り病にかかっていて死にそうな所を、僕は可哀想に思っただけだった。でも病氣も癒されず残ってしまい、彼に苦しみを与えただけだった。思い人とは生涯過ごせたが、その人が亡くなると、この子は自分自身を告発して自ら断頭台に登ってしまった」

肖像画を眺めるヴァニタスの目はどこか遠く、当時に思いを馳せているようだった。何年前の話だろうか。途方もない歴史の一端がこの廊下に密かに存在した。

「ヴァニタス？」

ケ빈が名前を呼ぶと、ハツとした様子で振り返って一瞬だけケ빈が何故ここに居るかわからないような表情をしていた。一瞬だけだったが確かにケ빈に伝わってしまった。

「大丈夫か？」

できるだけ優しい声色でケ빈はヴァニタスに声を掛け、その腕を掴んだ。それがケ빈の不器用で精一杯な思いやりだった。

ヴァニタスは目頭を押さえながら自嘲気味に笑った。

「すまない、昔に浸りすぎたね」

何を言うべきか、ケ빈は逡巡したあとようやく言葉として出した。

「とりあえず座ろう」

廊下に飾られている長ソファに座らせた。目の前の肖像画たちがよく見える場所に置かれていた。

いつも余裕があつて、何事にも動じない。ヴァニタスについてそんな性格だと

思っていたケビンだったが、思わぬ弱い部分を見てしまい少なからず動揺していた。幼いころに見た酒を煽りながら泣きむせぶ父の姿が頭にチラつく。

気を紛らわすために、ケビンは一つ一つの肖像画や古びた写真たちを眺めていった。セピア色の恰幅のよさそうな男性、海辺を背景に振り向く瞬間をとらえたであろう女性のカラー写真。本を読んでいるアジア人の横顔を写した白黒写真、おそらくこの館の庭をモデルにしたであろう外に置かれたベンチに座るドレス姿の女性の肖像画。

その肖像画や写真の数だけ、ヴァニタスが見送ってきた人生があると感じ、ケビンはその途方もない時の流れに圧倒されていた。

「あんたいったい何歳なんだ？」

振り返ったケビンが聞くと、目元を赤くしたヴァニタスは力なく微笑んだ。

「忘れちゃった」

「忘れちゃったじゃないだろ」

ケビンが突っ込むも、ヴァニタスの鬱々とした態度は変わらなかった。

長ソファのひじ掛けに身を預け、額を覆うように手を添えていた。酷い頭痛の時のように。ケビンにはそれが現実から自分を切り離しているように見えた。

「お前が連れてきた場所なのに、お前がダメーじ受けてんじゃねえよ」

ケビンはそう言いながら、ヴァニタスの隣にドカッと座った。

「気が塞ぐときは飯の事を考えるといいつて施設に居た頃の寮母のおばちゃん言ってたんだ」

出来るだけ豪華なものを想像するといいんだとケビンは言う。P & Jなんて言語道断だとも。

虚を突かれポカンとした顔のヴァニタスを置いていくようにケビンは続ける。

「まずはステーキだ。肉は全てを救う。ステーキは外せない。肉に合うワインはあんたが適当に見繕ってくれ。サラダはレタスとエビとアボカドにしよう。たしか冷蔵庫にあったはずだ。あんたは何が食いたい？ヴァニタス」

「ええ……」

やや引き気味にヴァニタスは困惑の声を出した。

「そんな急に言われても解らないよ」

「何かあるだろ、何か」

「んー、君の血が飲みたいけど、冷凍している血がまだあるからそれをワインに溶かして……」

「それじゃダメだ。目の前に新鮮なのが居るだろうが」

ケビンはバツと袖をまくり上げ、ヴァニタスに腕を突き出した。

「ええ……いいの？」

「良いって言うてんだろうが」

ややイラつきだした声色でケビンが答える。

「じゃあ、いただきます……」

そう言うてヴァニタスは怖々ケビンの腕を取り、その手首に口を付ける。ぷつりと、鋭い犬歯がケビンの手首の肉を裂き、血が溢れてくる。ヴァニタスはそれを一滴たりともこぼさない様に吸い上げ飲み下す。

「ふはっ」

満足できるまで血を飲んだヴァニタスは、すかさずケビンの手首に付いた歯型を治療の魔法で消し去る。

「ありがとう、少し元気が出たよ」

やや表情が明るくなったヴァニタスが、ケビンに声を掛けるもケビンからの返答がなかった。

「ケビン？」

ヴァニタスの声に答えられずに、ケビンは脱力しもたれ掛かってきた。意識がない。

「ケビン？ケビン！」

ヴァニタスの声だけが廊下に響いた。

「またやっちゃった……」

ベッドに横になったケビンが呟く。前回と同じように腕には点滴が繋がれており、ヴァニタスが心配そうに隣で座っている。しかも今度は、ヴァニタスの私室のベッドに寝かされていた。

「君、迷走反射神経持ちなんだから無理しちゃダメだよ」

目覚めたケビンに安心しつつ、ヴァニタスは釘を刺した。

「それはお前が……まあいいや」

不服そうにケビンは声を上げるが、すぐにそれをやめた。元の調子をヴァニタスを取り戻したことで満足したからだった。

「君の優しさはいつもこうなのかい？直球で荒々しくて体当たりで」

「覚えてないね。ていうか不器用って言いたいのか？」

「ははは、まあ、否定はしないけど」

ヴァニタスに笑いながら言われて、ケビンは長い溜息を吐いた。

「あーもうステーキ食いたい、焼き加減はレア、添える野菜はニンジン、ブロッコリー、ジャガイモで。良く茹でてあるのがいい」

「ご注文承りました。点滴が終わるまでは安静にね。食事ができたらまた来るよ」

ケビンの要求を軽くあしらひ、ヴァニタスは部屋を出て行った

「優しさ、ね」

空いてる手で頭をバリバリ掻きむしる。

「慣れない事するもんじゃねえな……」

ケビンの漏らした呟きが、広い部屋に響いて消えた。